



Title	<書評>伊藤亜紗（著）『手の倫理』
Author(s)	矢守, 克也
Citation	災害と共生. 2021, 5(1), p. 41-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84565
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

伊藤亜紗（著）『手の倫理』 講談社、2020年10月刊、214頁

矢守克也¹

Katsuya Yamori

1. 「さわる／ふれる」に関する常識とその先

(1) 「さわる／ふれる」に関する常識

触覚に関する日本語の動詞には、「さわる」と「ふれる」の2種類があって、私たちはそれらを、ときに意識的に、ときにあまり自覚することなく使い分けている。どちらかと言えば、「さわる」は一方的で、「物」に対してドライにかかわる感じで、それに対して、「ふれる」は双方向的で、「ひと」に対してあたたかくかかわる感じがする。たしかに、これがごくナチュラルな受けとめであり、使い分けであろう。

「さわる／ふれる」について、本書には、もう一つ次のコントラストも登場する。「さわる」では、一方的で、発信者と受信者の役割境界が明瞭で、予め意味が規定されたコードを媒介とした「伝達モード」[p.120]のコミュニケーションが支配的となりやすい。これに対して、「ふれる」は、双方向的で、融合的で、意味が「その場でつくられていく」[p.125]のような、「生成モード」[p.120]のコミュニケーションを生むことが多い（以下、書評の対象書からの引用頁はすべて〔括弧〕で表記する）。

このとき、触覚に関して、以上の2分法を踏まえて、現代社会においてとかく主流になりがちな「さわる」（伝達モード）に対して、「ふれる」（生成モード）の重要性を指摘することは、たしかに大切なことである（後出の図1も参照）。たとえば、「どんなときも、相手に十分配慮して、けっして物を扱うようにしてはいけません、“ふれ”あいが大事です」は、人と人との接触を伴う対人ケアの場面などでしばしば耳にするせりふである。

本誌『災害と共生』と密接に関連する領域からも、類似の事例を引くことができる。たとえば、被災者を対象とした「足湯ボランティア」について論じられる中で（似田貝、2014など）、「ふれる（ふれあう）」ことやそれがもたらす「生成モード」のコミュニケーションの意義が、生活再建に必要な情報を言葉で周知するといった「伝達モード」のコミュニケーション（特に、その落とし穴）との対比において、強調されてきた。

(2) 視聴覚／触覚に関する伝統的位置づけ

さらに、「さわる／ふれる」を問わず、触覚が総体として、視覚、聴覚、嗅覚などから成る「感覚のヒエラルキー」[p.56]において、特に視覚に対して、「伝統的にその『距離のなさ』や『時間がかかる』という特徴から、下級の感覚と位置づけられてき」[p.59]たことも見逃せない。伝統的には、視覚こそが、人間の認識の中核だと見なされてきた。対象のアイデア、つまり、ものごとの真の姿や本質を感得するための最上位の感覚モードは視覚だとされてきたのである。ちなみに、「アイデア」がギリシャ語の「イデイン」（見る）に由来することも、視覚優位を物語っている。以上のことは、身体という物理的メディアを介した触覚によるコミュニケーションは、言語という記号のメディアを介した視聴覚によるコミュニケーションよりも、全体として劣位に置かれてきた、と言いかえてもよい（再び、後出の図1も参照）。

本書では、以上を前提に、触覚の見直しや再構築が図られる。ほんの一例であるが、「手ぬぐい柔道翻訳」という奇抜なアイデアが本書に登場するので、紹介しておこう[p.191]。これは、目の不自由な方と柔道を観戦するためのユニークな手法である（本当は、観戦（見る）という用語を使うのは、必ずしも適当ではないのだが）。

手拭いの両端を持った2人の支援者が、担当選手を決めた上で試合の様子を映像で見て、選手の動きに合わせて手拭いを動かす。その手ぬぐいの中央部を視覚障害者が握っている。2人の選手のやりとりが手ぬぐいの両端を引いたり押したりねじったりする支援者2人の動きとなって視覚障害者に伝わるという仕組みである。この手法は、言葉を尽くして競技の様子を伝える「実況」という名のコミュニケーション（見えていることが言葉にされ、その言葉を聞くという行為）とはちがった効果を生む。これまで肩身の狭い思いをしていた触覚が視聴覚の帝国に反撃の狼煙を上げているようで、とても痛快な感じがする。

ただし、「さわる」の限界や陥穽を提示して「ふ

*1 京都大学防災研究所 教授・博士（人間科学）

Professor, Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University, Ph.D.

れる」の重要性を強調すること(1項)や、視聴覚優位に対して触覚の復権を謳うこと(本項) — こういった論調それ自体は、ほぼ常識の追認と言えるものだ。その意味で、本書の真骨頂は、こうしたわかりやすい議論からはみ出した部分の方にある、と評者は考える。本節ではまず、次項(3)でその断片をいくつか拾って大まかなイメージを提示しておいて、より詳しくは、節をあらためて、「伝達／生成モード」に関して著者が提示した解説図をよりどころとしながら2節で論じることにする。

(3) 常識を越えて — 3つの引用

まず、ひとつめの引用。

もっとも、人間の体を「さわる」ことが、つまり物のように扱うことが、必ずしも「悪」とも限りません。たとえば医師が患者の体を触診する場合。…(中略)…同じように、相手が人間でないからといって、必ずしもかわりが非人間的であるとは限りません。物であったとしても、それが一点物のうつわで、作り手に思いを馳せながら、あるいは壊れないように気をつけながら、いつくしむようにかかわるのは「ふれる」です。[p.6]

人間に物のように「さわる」こともできるし、物に人間のように「ふれる」こともできる。しかも、「ふれる」は容易に「さわる」に転じうるし、逆に「さわる」のつもりだったものが「ふれる」に変容することもある。要するに「さわる／ふれる」の関係はそれほど単純ではない。加えて、これまでも繰り返し指摘されてきたように、触覚についてはその主体と対象が容易に反転する。つまり、いつの間にか、うつわの方が自分にさわったりふれたりしているのを感じることもすらある。

続いて、ふたつめの引用。

信頼し、身をあずけることの価値は、必ずしも触覚でないと実現できないものではありません。言葉を使って人に「ふれる」ことだっておそらくできるでしょうし、分身ロボットを使って「ふれる」ような時代も近いうちにやってくるでしょう。ウィズコロナの世界において、人類の接触の絶対量が減ったとしても、触覚がもつ価値は別の形で受け継がれていく必要がある。[p.15]

触覚(物理的メディア)と視聴覚(言語的メディア)の区別、あるいは、著者の言う「生成モード」と「伝

達モード」の区別(後出の図1を参照)、これらもけっして絶対的なものではない。この箇所では、本書の主題が触覚であるがゆえに、また、コロナ禍にあってそこに大きな制約が課されているがゆえに、逆に、視聴覚(言葉)が有する触覚的な側面や機能に光をあてようとしている。そして、次に引く引用は、「さわる／ふれる」の交錯した関係性について、上とはまた別の形で、その極北を示唆している。

最後のみつつめの引用。

死にゆく体を「さわる」…(中略)…ここには、人間の手に負えない「絶対的な遠さ」を前提にした触覚、受け身でしかありえない、交感を拒絶する「さわる」の極致があります。[p.139]

この引用部の前後で、著者は、「みとり」に立ち会ってきたあるケアワーカーの著作で、一貫して「さわる」という表記(「ふれる」ではなく)が用いられていることに注目している。医師によるドライな触診という意味での(医師から見て)能動的な「さわる」に対して、常に「ふれる(ふれあい)」(交感・交流)が対抗馬となるわけではない。「ふれる(ふれあい)」をさらに突き抜けた地点に、ここで言われている(もう一つの)「さわる」、つまり、医師やケアワーカーの側が受動的にならざるをえない「さわる」、「私たち人間がどうできる領域の外部にある」[p.139]存在との接触として特徴づけられる「さわる」を想定しうるものが、ここで洞察されている。

2. 「伝達モード／生成モード」の交錯

(1) 「ふれる」と「さわる」の等価値性

下の図1は、本書に登場する2つの図、すなわち、図3(メディア／モードによるコミュニケーションの分類)、および、図4(「さわる」は伝達、「ふれる」は生成)として提示されている2つの図を統合し、かつ、評者なりの追記を施して独自に作成したものである。実線部は本書のオリジナルな図に示されているもので、点線部が評者の追記部分だが、点線部も本書の他所で著者自身が言及しているワードである。本図の基本的な解説は、該当箇所(図3[p.127]、図4[p.129])に譲り、ここでは、1節(3)項で引いた3つの引用部が、本図にどのように位置づけられるか — 正確に言うと、どのような意味で位置づけられるか — を説明することを通して、「さわる／ふれる」に対する理解を深めていきたいと思う。

最初の引用部 [p.6] は、著者が「触覚的コミュニケーション」として括った領域、つまり、評者が追記した「B」と「D」の領域に関する議論であった。上述の通り、基本的には、「さわる」が触覚における伝達モード、「ふれる」が同じく生成モードに対応する。しかし、「さわる」は物に対する姿勢で好ましくなく、「ふれる」こそが人に対する望ましい関与である、などと表層的な理解に陥ってはならない。

第2の引用部 [p.15] は、要約すれば、「信頼し、身をあずけることの価値」は、「D」の領域に相当するコミュニケーションでしか実現できないものではない、との主張である。「D」領域について、著者はまず、哲学者坂部恵氏の所説も引きながら、触覚の「内部的にはいりこむ」性質 [p.77]、つまり、「一つの対象への没入」 [p.76] に向かう力に注目してい

この理解は、「ふれる（ふれあう）」のコアにある性質に関する通説を適確に概念化していると言える。ただし、その性質が「D」領域のコミュニケーションにのみ宿っていると理解するのは、本書が示唆する通り、短絡的な考えだろう。さしあたって、

あえてそうしていないのは、そこでめざされていることが「伝達」ではなく「生成」だからだろう。これらの文学的コミュニケーションでは、作品の作者と鑑賞者が「対話」し、互いに相手の中へと「相互嵌入」することこそが大切にされている。もっとも、こうした「対話」は、文学作品にだけ限られるものではない。遠く離れて暮らす親と子、恋人同士、こういった人びとの間で交わされる手紙やメールも同じことである。そこでは、選びとられた小さな言葉の一つ一つ、微妙に揺れる表現の細部を、言わば接触面にした「相互嵌入」が生じうる。コロナ禍にあっては特に、記号的メディアを通した「ふれる」の重要性がいっそう増しているし、それは十分に深いものになりうる。

最後の第3の引用部 [p.139] は、多くの示唆を含んでいると思われる。が、一義的には、「ふれる（ふれあい）」を通した「相互嵌入」をコミュニケーションの理想形や完成形のように見て、それで自足したり、それとの対照で「さわる」や記号的メディアを用いたコミュニケーションを無条件に劣位と見なしたりする考えに待ったをかけるものと見ることができる。ただし、先に1節(1)、(2)項で見たように、もちろん逆も真なりである。「さわる」（触覚における伝達モード）が「ふれる」（触覚における生成

モード)を、また、視聴覚が触覚を抑圧しがちであった旧来の認識論にも反省は向けられるべきことはおさえておかねばならない。

さて、問題は、「ふれる(ふれあい)」をさらに突き抜けた地点に、(もう一つの)「さわる」が現れるという主張である。著者は、この部分で、哲学者鷲田清一氏も同じことを指摘していると述べる。つまり、「ふれる」のなかに、実は「さわる」が含まれているというのだ。「『ふれる』には、坂部が言うような『自分と他者の境界の溶解』あるいは『相互嵌入』で片付けるべきではないような部分があるのではないかと、鷲田は言います」[p.140]。これは、どういうことだろうか。

「ふれる」を突き詰めていくと、その果てには「さわる」が、つまり、「ふれあう」ことなど不可能な存在として対象(相手)が立ち現れてくる次元がある。これは「人間の手には負えない『絶対的な遠さ』」を前提にした触覚、受け身でしかありえない、交感を拒絶する『さわる』の極致」[p.139]である。考えてみると、「声高に語る自然のことば」[p.139]に静かに耳を傾け、見つめ、その手触りをただ感じとろうとする、この姿勢は、自然(その禍々しさを含めて)に対峙するとき、人類が示したであろう原初的態度である。自然科学も、そのルーツにまでさかのぼれば、それは、交感不能な対象—自然—に「さわる」ことから始まったはずである。

「ふれる」の極限や起原に「さわる」があるとの理解は、さらに、次のような推定を許す。「ふれる」と「さわる」は、けっして水と油のように対立しているのではなく、むしろ逆に、互いが他の基盤となって前向きに相互強化する関係にあるはず、という見立てである。実際、このことを示唆する事例や取り組みはいくつも指摘できる。たとえば、「自然現象について研究するのに近い」(國分・熊谷, 2020, p.39)と形容され、問題の「外在化」というプロセスを中核部分にもつ「当事者研究」がそうである(矢守, 2019)。

ここに、気落ちの抑えがどうしてもきかなくて、感情的に「爆発」してしまうという問題に苦しむ人がいたとする。「爆発」は、その人の一番近いところにある問題で、一見すると、それに直に「ふれる」ことなど至極簡単そうに見える。しかし、それに自ら「ふれ」ようとしても、あるいは、同じ問題を抱える人たちとダイレクトに「ふれあい」、「相互嵌入」に活路を見出そうとしても、難題は容易に解消しない。そこで導入されるのが、「爆発」する自分

や他者に「ふれる」のではなく、絶対的な遠さにあって交感不能な研究対象であるかのように、爆発現象に「さわる」こと、さらに進んで、それについて「研究」という姿勢である。この構えが苦しみの軽減へ向けた突破口になる。

ここに見られるのは、「ふれる」(図1の「D」領域)と「研究」(図1の「A」領域)との交絡である。すなわち、一方で、自らの爆発現象について、「爆発に関するレポート」の執筆や仲間との報告検討会のような、記号的メディアをつかった伝達モードによるコミュニケーション(図1の「A」)と位置づけるほかない活動が、たしかに問題解消への糸口となっている。しかし他方では、「自分自身で、共に」という当事者研究のキャッチフレーズにあらわれているように、「研究」を仲間たちと共になすことのベースには、当事者たちによる共同生活がある。実際、当事者研究の報告書には、まさに「相互嵌入」と表現したくなるような濃密な「ふれあい」の場面が多数登場する。こちらは「ふれる」、つまり、図1の「D」の領域にプロットすべき活動である。

要するに、「当事者研究」には、図1に示した4つの領域を越境する運動を見てとることができるのだ。ある意味でもっとも遠く隔てられているように見える「A」と「D」の両領域すら相互に補完する関係にある。さらに、前述した通り、「B」と「D」の間、あるいは「D」と「C」の間にも、入り組んだ交流を想定できた。こうしたことを踏まえると、言葉によるコミュニケーション(図1の「A」と「C」に相当)と非言語的コミュニケーション(「B」と「D」に相当)、あるいは、「さわる」(「B」)と「ふれる」(「D」)とを単純に対照させることは、真に独創的で有用な実践を模索するという観点にたったとき、あまり有益な態度とは言えないことがわかる。

図1の4つの領域の間には、粗雑な対立関係ではなく、精巧な相補関係を見るべきとの論点を補強する事例は、「当事者研究」のほかにも見出すことができる。ここでは、本誌『災害と共生』に関わる領域から、評者自身が関わりをもった事例を追記しておこう。評者らは、長年にわたって、高齢者等、津波避難に大きな困難を抱える人たちとともに、災害に対する備えに関する活動を続けている。最近の報告としては、Yamori and Sugiyama(2019)、矢守・浦上(2019)、杉山・矢守(2019)、Okada and Yamori(2020)、Sugiyama and Yamori(2020)などを参照してほしい。

そうした報告のうちの一つ、孫(2016)に、ある高齢の女性の事例が紹介されている。「避難困難地

域」とか「災害時要支援者」といった大括りな把握ではなく、そこに暮らすそのXさんだけに焦点化して、Xさんの避難の課題を、徹底的に「外在化」して考えてみる。たとえば、Xさんが歩く速さやXさん宅から最寄りの高台までの距離、所要時間、Xさんの日々の生活リズムなどを、Xさん宅周辺で予想される津波の浸水予測シミュレーションとともに検討する。また、「手取り・足取り」、Xさんと一緒にシルバーカーを押して高台まで何度も上ってみる（ちなみに、本書にも、重要なケーススタディとして、著者による視覚障害者とのランニング伴走体験が登場する）。

Xさんの避難行動を「外在化」して記号的メディア（言葉や数式）を使って記述する作業（あえて割り付ければ、図1の「A」）や、一緒に高台へ歩くこと（図1の「B」）、あるいは、Xさんの自宅でとりとめもない雑談を繰り返すこと（図1の「C」）は、やがて、Xさんの生活のすべて（家族や趣味や日ごとの暮らしや、それまでの長い人生）を通して、評者らがXさんに「ふれる」こと、逆に、Xさんが評者ら（研究者）のパーソナルな一面に「ふれる」こと、そういった「ふれあい」（図1の「D」）を伴うようになる。そして、それがまた、「A」領域はじめ他の領域の活動を変容させていく。

こうした連関は、第三者による検証委員会といった場で展開される「サバイバルファクター」（事故現場などで生死を分けたクリティカルな要因）を探る活動（図1では「A」に相当）と、その同じ事故で、亡くなった家族の最期の瞬間や場所の細部に遺族が強くこだわり、何としても同じ時間と場所と一緒に感じたい、つまり亡くなった大切な人と「相互嵌入」したいと望むこと（図1では「D」に相当）とが、究極のところで通貫している可能性がある、との評者の主張（矢守, 2020）にも通じるものである。

3. 「手の倫理」

(1) 「道徳」ではなく「倫理」

本書には、上で取りあげた論点のほかにも、注目すべき主張、興味深い事例が多数紹介されている。そのすべてに言及することはできないので、ここでは、書評の責をわずかでも果たすべく書名に採られているキーワード「倫理」に関わる部分に絞って若干の補足をしておきたい。

著者は、本書の冒頭で教育学者フレーベルを参照しつつ、石を使って遊ぶ子どもたちのふるまいのバラエティに注意を促して、次のように述べる。

「ただ外から石を眺めているだけでは気がつかない性質…（中略）…『目を通して出会う石』と『手を通して出会う石』の違い」[pp.28-29]が重要だ、と。そして、この違いが、身体接触（介助）を必要としない健常者の身体を基準とした倫理としての「まなざしの倫理」と、接触を通じて、対象（物）の性質を知ると同時に、それが「自分自身を知ること」へと折り返されていく「手の倫理」との対照へと一般化される。

さらに、「すべき」が「できる」を自動的に含意する「道徳」と違って、「倫理」には、「すべきができない」というジレンマが伴うことが大切だと著者は述べる。道徳は普遍と、倫理は個別とそれぞれ結びついて、「すべき」という道徳は「すべきができない」というアンビバレンスを切り捨てているというわけだ。

ここで大切なことが3つある。一つは、「倫理に『迷い』や『悩み』が付きものである、ということは、倫理が、ある種の創造性を秘めているということの意味している」[p.40]という具合に、「倫理」の個性や状況依存性をポジティブにとらえる点、である。次は、本書の主題たる触覚を、「道徳」ではなく「倫理」の方と親和的だととらえる点、である。そして最後は、「倫理」との結び付きのベースに、「私と私でないものの境界が曖昧になる」[p.180]、つまり「相互嵌入」という触覚にとりわけ特徴的に見られる様相が関与している点、である。

以上について考察するためのスタート点は、触覚においては対象の性質について知ることと自分について知ることとが並走するという事実にある。著者は、接触の仕方によって、対象のどのような性質が浮上してくるかが変わる点に触覚の面白さを見る。たとえば、表面をなでれば対象のテクスチャが、両手で包み込めば対象全体の形が、圧をかけて押し込めば対象の硬さが、それぞれ明らかとなるといった調子である。対象自体に客観的な性質が宿っているのではなくて、接触するという主体の側の身体運動のいかんに応じて、対象についてそれぞれ違った情報が引き出されてくる。

もっとも、こうした連関は触覚だけでなく視覚（感覚一般）についても言えるのではないかと、との反問も当然予想される。たしかに、そうである。どのように見るかによって何が見えるかが変わるという構成主義的なテーゼは、今日ではもはや常識とも言える。しかし、客観的な観察を通して普遍的なアイデアを同定する（同定できるし、そうすべきである）

という視覚を基軸とする伝統的な構えが相当に根強いことも事実であり、触覚によるカウンターが重要な意義をもっていることもたしかだろう。

いずれにせよ、上に見た認識モードとしての触覚の不安定性（だれがどうさわるかによって、何が認識されるのかが変わることが前提とされるのだから）は、裏を返せば、創造性、生成性の源だ。これが、著者の見通しである。「生成モードの創造性は、必ずしも『できる』という前向きの可能性から生まれるとは限りません。倫理が問題になるのは、『こうあるべきだ』という道徳的な理想が実現できないときです。…（中略）…倫理とはむしろ『できないこと』に出会い、悩む、限界確認の作業にほかなりません」[p.141]。

評者としては、まったく手前味噌ではあるが、「逃げるべき／助けるべき」といった道徳観では済まされない境地で、当事者たちによって「生成」されてきた知恵として位置づけた「津波てんでんこ」（矢守, 2012, Yamori, 2014）や、「正解」を「伝達」するのではなく「成解」を「生成」するツールとして開発・運用してきた防災学習ツール「クロスロード」（矢守・吉川・網代, 2005, Yamori, 2011, 矢守・GENERATION TIMES, 2014など）など、評者自身の複数の仕事に、本書の主張とのシンクロを感じた次第である。

(2) 身体境界の溶融がもたらす希望

「触覚」と状況即応的な「倫理」との関連のベースに、著者は、触覚における身体境界の溶解（身体境界の膨縮）—たとえば、杖を頼りに歩くとき杖の先で路面を感じたり（杖の先端まで身体が拡張）、また、歩き疲れて自分の足を（身体外部の）「棒のように」感じたり（足を外部として位置づけるところまで身体が縮退）—特に、そのポジティブな効果を見る。（なお、ここで、冒頭で紹介した「手ぬぐい柔道翻訳」を思い出してみるとよい。翻訳者や視覚障害者は、まさに身体の膨縮を通して、対戦者（の身体）になっている。このことが異色のコミュニケーションを成立させていた。）

この「私と私でないものの境界が曖昧になる」状態は、自分が感じ、反応する内容を、自分でもコントロールできなくなることの意味します。自分でもそのつもりがなかったものに乗っ取られる。触覚には、私たちをきわめて無防備な状態にする力があります。倫理が自らを律し、ふるまいを制御することを指すのであれば、これはまっ

たくもって非倫理的な状態と言わざるを得ません。
[p.180]

しかし、この一見すると非倫理を惹起しそうな特性こそが、触覚と倫理との連帯の拠りどころとなる。すなわち、

触覚は直接対象にふれるため、しばしば「リアリティ」や「確からしさ」に関する感覚だと言われてきた。…（中略）…しかし、ここにあるのは、それとはまったく逆の触覚のあり方です。…（中略）…むしろそれは、私たちが生きている世界のリアリティを不確かなものにしてしまうことがある。触覚は別のリアリティへと私たちをいざなう扉でもあるのです。[p.186]

触覚に特徴的な身体境界の曖昧化や相互嵌入は、一面で、自己の危機・崩壊かもしれない。しかし他面で、それは、従前の強固な「フレームを混同」[p.183]させ、「リアリティを混同」[p.183]させる。自己の溶融・分裂とは、他者との連帯へ向けた自己の開口部でもあり、そこを橋頭堡として、自己と他者との間に、まったく新しい関係が構築される（矢守, 2021）。このプロセスは、従前の「こうあるべきだ」（道徳）の呪縛を解き放って、「みなでこうすることもできるかもしれない」（倫理）を新たに生成するためのステップになる。この点に、著者は「手の倫理」の希望を見いだしているわけだ。

参考文献

- 國分功一郎・熊谷晋一郎（2020）．〈責任〉の生成 — 中動態と当事者研究 新曜社
- 似田貝香門（2014）．被災者の奮う生命、共感、支援、自立—足湯ボランティア「つぶやき」の分析から— 復興, 10(6), 53-59.
- Okada, N. & Yamori, K. (2020). Action research on bosai map cycle: Communications and interactions among stakeholders involved in mapmaking activities. *Journal of Disaster Research*, 15, 783-793.
- 杉山高志・矢守克也（2019）．南海トラフ地震の「臨時情報」に対する社会的対応に関する基礎的考察 地区防災計画学会誌, 15, 53-60.
- Sugiyama, T. & Yamori, K. (2020) . Consideration of evacuation drills utilizing the capabilities of people with special needs. *Journal of Disaster Research*, 16, 794-801.
- 孫 英英（2016）．個別避難訓練タイムトライアル 矢守克

矢守：伊藤亜紗（著）『手の倫理』

也・宮本 匠（編著）「現場でつくる減災学 ― 共同実践の5つのフロンティア」 新曜社 pp.27-47.

Yamori, K. (2011). Using games in community disaster prevention exercises. *Group Decision and Negotiation* 21, 571–583.

矢守克也 (2012) . 津波てんでんこの4つの意味 自然災害科学, 31, 35-46.

Yamori, K.(2014). Revisiting the concept of tsunami tendenko: Tsunami evacuation behavior in the Great East Japan Earthquake. (In) Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University (eds.). *Natural disaster science and mitigation engineering: DPRI Reports (Vol.1), Studies on the 2011 off the Pacific Coast of Tohoku Earthquake*. Springer Verlag pp.49-63.

矢守克也 (2019) . 書評：浦河べてるの家（著）「べてるの家『当事者研究』」 災害と共生, 2(2), 41-45.

矢守克也 (2020) . 書評：八木絵香（著）「続・対話の場をデザインする」 災害と共生, 4, 143-152.

矢守克也 (2021) . 書評：伊藤亜紗（著）『記憶する体』 災害と共生, 4(2), 25-31.

矢守克也・GENERATION TIMES (2014) . 被災地DAYS : 時代QUEST ― 災害編 ― 弘文堂

矢守克也・吉川肇子・網代 剛 (2005) . 防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション：「クロスロード」への招待 ナカニシヤ出版

Yamori, K. & Sugiyama, T. (2020). Development and social implementation of smartphone app Nige-Tore for improving tsunami evacuation drills: Synergistic effects between commitment and contingency. *International Journal of Disaster Risk Science*, 11, 751–761.

矢守克也・浦上滉平 (2019) . 津波避難訓練への参加率と実際の災害時の行動の関連性―高知県四万十町興津地区を事例に― 地区防災計画学会誌, 15, 26-33.